

# 対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が 精神的健康に及ぼす効果<sup>1</sup>

佐 藤 広 英（信州大学）

## Effects of automatic impression management in interpersonal communication on mental health

Hirotsune Sato (Shinshu University)

### 要 旨

自己呈示は繰り返し行われることで自動化することが指摘されており，自動的な印象操作と呼ばれる。本研究は，対人コミュニケーションにおいて自動的な印象操作を行う程度を測定する尺度を作成し，その信頼性・妥当性を検討すること，初対面の相手や親しい相手に対する自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果を検討すること，を目的とした。大学生225名（男子120名，女子105名）を対象とし，質問紙調査を実施した。その結果，初対面の相手，親しい相手に対する自動的な印象操作の程度を測定する尺度が作成され，その信頼性・妥当性が確認された。また，共分散構造分析の結果，親しい相手に対して自己呈示を多くおこなう者ほど，自動的な印象操作を多く行い，その結果，精神的健康を低めるという過程が確認された。

キーワード：自己呈示，自動性，印象操作，精神的健康，対人コミュニケーション

### 問 題

我々は，状況に応じて他者に与える印象を変えようとすることがある。対人コミュニケーションにおいて「望ましい自己イメージを他者に与えようと意図的に行われる統制されたふるまい」のことを自己呈示（self-presentation）という（Tyler, 2012）。自己呈示にはいくつかの種類があり，望ましい自己を積極的に他者に示すことや目的を達成するのに有利な印象を他者に与えることを目的に行われる主張的自己呈示（assertive self-presentation）と，他者が自分に対して否定的な印象を抱いているとき，もしくは抱く可能性があるときに，自己のイメージの悪化を回避することやイメージの回復を目的に行われる防衛的自己呈示（defensive self-presentation）に分類される（安藤，1994）。

自己呈示は意図的に行われる行動と定義されるが，無意識的，自動的に行われることがあ

ると指摘されている (Paulhus, 1993; 定廣・望月, 2001; Schlenker & Wowra, 2003; Tyler, 2012)。Paulhus (1993) は、ある動作がくり返し行われたことにより、意識することなく作用するようになる自動処理が自己呈示に対しても起こりうるとし、特定の印象を与えることを目的とする自己呈示が頻繁に行われたことにより、わずかな内省や記憶の探索だけであまり意識せずに引き起こせるようになった自己呈示のことを「自動的な自己呈示 (automatic self-presentation)」と呼んでいる。また、Schlenker & Wowra (2003) は、意図的に行われていた自己呈示が習慣化し、自動的に行われるようになることを「自動的な印象操作 (automatic impression management)」と呼んでいる<sup>2</sup>。

自動的な印象操作は、自己呈示が必要とされる対人コミュニケーション場面において自然と望ましい自己イメージを提供できる可能性が考えられるが、同時に、自己呈示が必要とされない対人コミュニケーション場面においても印象操作を行ってしまい、その結果、ストレスを感じたり、後悔したりするということもあるだろう。田島 (2010) は、一貫した自己概念を共有する対象として重要である親密な関係性において、意識的に別の自己を呈示したと主観的に感じているほど、抑鬱や不安傾向が高まることを明らかにしている。また、意に反した自己呈示の後には、不快感や憂鬱感が生じることも報告されている (水野, 1994)。

このように、自動的な印象操作は、精神的健康を低める可能性が考えられる。しかし、従来自己呈示に関する研究は多く行われているが、その自動的な側面に焦点をあてた研究はほとんど行われておらず、また、精神的健康との関連を検討した研究はみられない。そこで、本研究では、自動的な印象操作を「日常生活において行っていた自己呈示が習慣化し、場面に応じて自動的に行われるようになった印象操作」と定義した上で、次の二点を検討することを目的とする。

第一に、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の程度を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することである。従来自動的な印象操作の存在が指摘されているが (e.g., Paulhus, 1993)、その程度を測定する尺度については検討されていない。そこで、本研究では、従来の自己呈示に関わる尺度から印象操作に関わる項目を抽出し、自動的、無意識的な行動であることを示す表現を加える形で項目の作成を行う。また、尺度を作成するにあたり、他者との関係性を考慮に入れる。従来、他者との関係性は自己呈示の種類や程度を規定する要因の一つとして挙げられる (Leary, Nezlek, Downs, Radford-Devenport, Martin, & McMullen, 1994; Tice, Butler, Muraven, & Stillwell, 1995)。Leary, et al. (1994) は、他者との親密性が自己呈示動機に対して抑制的にはたらくことを指摘しており、親しい相手に対しては、親しくない相手に対してよりも自己呈示動機が低いことを示している。他者との関係性によって自己呈示動機が異なるという知見を考慮すると、他者との関係性によって自動的な印象操作の影響が異なる可能性が考えられる。そこで、本研究では、印象操作の対象として初対面の相手と親しい相手を設定し、それぞれに対する自動的な印象操作の程度を測定する尺度を作成する。

自動的な印象操作を測定する尺度の妥当性を検討するにあたり、本研究では、自己呈示動機および衝動性との関連を検討する。意図的な自己呈示の習慣化により自動的な印象操作が行われるという知見 (Schlenker & Wowra, 2003) に基づけば、自己呈示動機が高い者ほど自己呈示が習慣化しやすく、その結果、自動的な印象操作も行われやすいと考えられる。ま

た、自動的な印象操作には、衝動性に関する側面が含まれると想定される。衝動性とは、自分や他人によくない結果を招く可能性を考慮せずに、内的あるいは外的な刺激に対して拙速で無計画な反応を行う特性のことである (Moeller, Barratt, Dougherty, Schmitz, & Swann, 2001)。自動的な印象操作は、熟慮せずに行われる自動的な行動であることから、衝動性が高い者ほど自動的な印象操作も行われやすいと考えられる。

第二に、自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果について検討することである。意図的な自己呈示の習慣化により自動的な印象操作が行われるという知見 (Schlenker & Wowra, 2003) を踏まえると、意図的に行われる自己呈示が自動的な印象操作を媒介として精神的健康に影響を及ぼすという過程が想定される。そして、前述の通り、自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果は、他者との関係性によって異なることが予想される。田島 (2010) は、親密な関係性において自己呈示を行うことが精神的健康を低めることを示している。Gosnell, Britt, & McKibben (2011) は、本当の自分自身を見せることが望まれる親しい相手に対しては、あまり自己呈示を行わないことが高い関係満足感につながることを示している。これらのことから、親しい相手に対する自動的な印象操作は、自己呈示と同様に、精神的健康を低めると予測される。一方、Gohar, Leary, & Costanzo (2016) は、親しくない相手に対しては、必要に応じてふるまいを変化させることが抑鬱、不安、孤独感の低減につながり、適応的であることを示している。また、Gosnell, et al. (2011) は、親しくない相手は自己呈示の必要性が高い相手であるため、多く自己呈示を行うほど関係満足感が高いことを示している。これらのことから、親しくない相手に対する自動的な印象操作は、自己呈示と同様に、精神的健康を高めると予測される。

以上を踏まえ、本研究では、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果について、Figure 1 の分析モデルを基に検討を行う。その際、自己呈示が社会的に望ましくない行動と判断される可能性を考慮し、社会的望ましさの影響を統制する。

本研究において対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果を検討することは、自己呈示に関する研究への理論的貢献につながるとともに、対人コミュニケーションの問題解決に向けた知見の提供へとつながると考えられる。

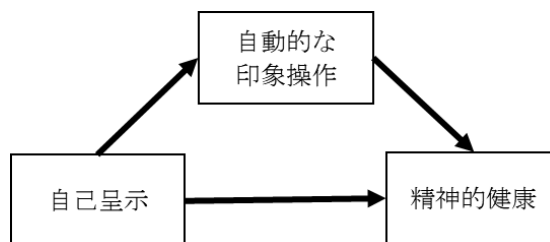


Figure 1 本研究における分析モデル

## 予 備 調 査

### 方法

**調査対象者** 大学生145名（男性86名，女性59名，年齢： $M = 18.92$ ， $SD = 0.87$ ）を対象とする質問紙調査を行った。調査は2016年11月上旬に実施した。

**調査内容** 日本語版自意識尺度（菅原，1984），改訂版セルフ・モニタリング尺度（石原・水野，1992），演技行動尺度（定廣・望月，2011）から印象操作に関わる項目を抽出し，「つい」「無意識に」「気がつくと」「習慣になっている」「知らず知らずに」「反射的に」「思わず」といった言葉を付け加え，自動的な印象操作を表す内容となる13項目を作成した。そして，「初対面の相手」と「親しい相手」を印象操作の対象として設定し，それぞれに対して各項目に書かれた行動内容を経験することがどの程度あるのかを，「1. 全くない」「2. あまりない」「3. ときどきある」「4. よくある」「5. 非常によくある」の5件法で尋ねた。

### 結果

「初対面の相手」，「親しい相手」ごとに因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，共に1因子構造が妥当であると判断された。因子負荷量が.30未満の各1項目を削除し，最終的に「初対面の相手に対する自動的な印象操作」12項目，「親しい相手に対する自動的な印象操作」12項目が得られた（Table 1）。なお，Cronbach の  $\alpha$  係数は .85，.86であり，共に高い内的整合性が確認された。

Table 1 自動的な印象操作項目に関する因子分析の結果

初対面の相手に対する自動的な印象操作	負荷量
初対面の人に対しては，思わず自分の印象を悪くしないように気遣ってしまう	.77
初対面の人の前では，どんなふうにもふるまえばよいのか考えるのが習慣になっている	.69
初対面の人の前では，つい面白くなくても笑ってしまう	.68
初対面の人の前では，知らず知らずに相手に好かれると思うことをしてしまう	.66
初対面の人と自分の意見が違っていても，気がつくと相手の意見に賛成しているようにふるまっている	.65
初対面の人の前では，その場に合わせて演技をするのが習慣になっている	.61
初対面の人に不愉快な表情をされると，反射的に謝りたくなる	.58
初対面の人の前だとついつい恰好をつけてしまう	.50
初対面の人の前で自分がしたことについて話すときには，思わず控えめにしてしまう	.47
本当はつらい状況でも，初対面の人の前では無意識に平気なふりをしてしまう	.41
初対面の人の前では，自分が得意なことは，相手から聞かれるまで言わないことが習慣になっている	.34
初対面の人に対して，気がつくと自分の魅力を印象づけようとしている	.32
	因子寄与 3.95
	$\alpha$ 係数 .85
親しい相手に対する自動的な印象操作	負荷量
親しい友人と自分の意見が違っていても，気がつくと相手の意見に賛成しているようにふるまっている	.76
親しい友人といるとき，本当は楽しくなくても楽しそうにふるまうことがよくある	.72
親しい友人が笑っているとき，つい面白くなくても笑ってしまう	.66
親しい友人に文句をいうときも，どこか相手の反感を買わないように注意している	.66
親しい人の前では，無自覚に良いところをみせようとしてしまう	.63
親しい人の前で，必要以上に感動しているかのようにふるまうことがある	.62
親しい友人に怒を感じたときでも，ついつい気にしていないようにふるまってしまう	.60
親しい友人でも不愉快な表情をされると，反射的に謝りたくなる	.55
親しい友人といるときに，相手を楽しませようとして，演技をしていたと感ずることがある	.51
親しい友人の前で自分がしたことについて話すときには，思わず控えめにしてしまう	.46
親しい友人の前でつい自分を目立たせようとはりきってしまう	.45
本当はつらい状況であるにも関わらず，親しい友人の前でも無意識に平気なふりをしてしまう	.44
	因子寄与 4.24
	$\alpha$ 係数 .86

## 本 調 査

### 方法

**調査対象者** 大学生238名を対象とし、質問紙調査を行った。回答に不備のあるものを分析対象外とし、有効回答は225名（男子120名、女子105名、年齢： $M = 19.08$ ,  $SD = 1.69$ ）であった。調査は2017年10月上旬に実施した。

**調査内容** 以下の項目から構成された。

(1) 自動的な印象操作および自己呈示：自動的な印象操作については、予備調査で抽出された「初対面の相手に対する自動的な印象操作」12項目、「親しい相手に対する自動的な印象操作」12項目を用いた。また、自動的な印象操作項目から「つい」「無意識に」などの自動性を表す言葉を、「積極的に」「あえて」「わざと」「意識して」などの意図を含む言葉に置き換え、「初対面の相手に対する自己呈示」12項目、「親しい相手に対する自己呈示」12項目を作成した。それぞれ、普段人と接するなかで、各項目に書かれた内容を経験することがどの程度あるかを、「1. 全くない」「2. あまりない」「3. ときどきある」「4. よくある」「5. 非常によくある」の5件法で尋ねた。

(2) 妥当性検証のための項目：自己呈示動機については、谷口・大坊（2005）の自己呈示動機尺度12項目を4件法で尋ねた。自己呈示動機尺度は、「外見的魅力」、「有能さ」、「社会的望ましさ」、「個人的親しみやすさ」の四つの下位尺度から構成される。また、衝動性については、小橋・井田（2017）の日本語版 Dickman Impulsivity Inventory（以下、DII）16項目を5件法で尋ねた。DIIは、「機能衝動性」、「非機能衝動性」の二つの下位尺度から構成される。

(3) 精神的健康：中川・大坊（1985）の日本語版 GHQ28 を用いた。最近3か月における自分の状態について、28項目4件法で尋ねた。

(4) その他：社会的望ましさによる影響を統制するため、谷（2008）の日本語版バランス型社会的望ましさ反応尺度（BIDR-J）24項目を5件法で尋ねた。BIDR-Jは、「自己欺瞞」、「印象操作」の二つの下位尺度から構成される。その他、性別、年齢について尋ねた。

### 結果

**尺度の基礎的検討** 自動的な印象操作および自己呈示については、初対面の相手に対する項目、親しい相手に対する項目それぞれの加算平均を算出し、尺度得点とした。自己呈示動機、衝動性については、逆転項目の処理を行った上で、下位尺度を構成する項目の加算平均を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。各指標の記述統計量および指標間の相関係数をTable 2 に示した。

自動的な印象操作および自己呈示の各得点について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、すべてにおいて .80以上の値が得られ、十分な内的整合性を有していることが確認された。また、自動的な印象操作および自己呈示の各得点と、自己呈示動機および衝動性の各下位尺度得点との相関係数を算出した結果、初対面の相手に対する自動的な印象操作および自己呈示については、すべての自己呈示動機と非機能衝動性との間に有意な正の相関が得られた。また、親しい相手に対する自動的な印象操作および自己呈示については、自己呈示動機の一

部と非機能衝動性との間に有意または傾向レベルの正の相関が得られた。

さらに、自動的な印象操作が、自己呈示の自動的な側面を表しているかを確認するため、自己呈示の得点を統制変数とし、自動的な印象操作の得点と衝動性の得点との間の偏相関係数を算出した。その結果、初対面の相手および親しい相手に対する自動的な印象操作と非機能衝動性の間で有意な正の相関がみられた ( $r_s = .14, .14, p_s < .05$ )。

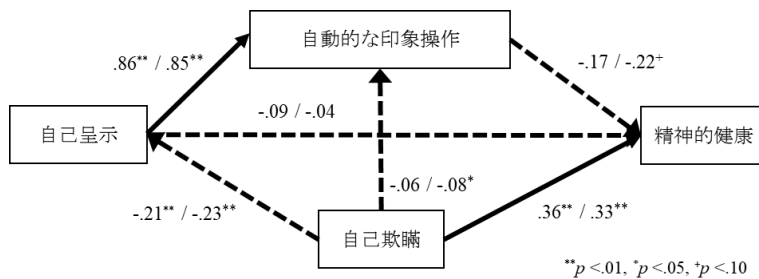
Table 2 各指標の記述統計量および指標間の相関係数

	<i>a</i>	Mean	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9
自動的な印象操作												
1. 初対面の相手	.82	3.12	0.60									
2. 親しい相手	.84	2.81	0.60	.70**								
自己呈示												
3. 初対面の相手	.86	3.07	0.64	.87**	.65**							
4. 親しい相手	.86	2.74	0.59	.64**	.87**	.69**						
自己呈示動機												
5. 外見的魅力	.89	2.36	0.85	.21**	.07	.17*	.07					
6. 有能さ	.83	2.73	0.69	.18**	.09	.16*	.11	.66**				
7. 社会的望ましさ	.80	2.83	0.72	.26**	.13*	.22**	.15*	.58**	.75**			
8. 個人的親しみやすさ	.84	3.12	0.75	.27**	.12*	.26**	.16*	.50**	.64**	.67**		
衝動性												
9. 非機能衝動性	.73	2.85	0.79	.30**	.23**	.26**	.18**	.15*	.02	.01	.09	
10. 機能衝動性	.82	2.63	0.65	-.01	.02	.05	-.01	.19**	.26**	.03	.13*	.21**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$

**自動的な印象操作と精神的健康との関連** 日本語版 GHQ28, 日本語版バランス型社会的望ましさ反応尺度については、逆転項目の処理を行った上で、下位尺度を構成する項目の加算平均を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。なお、各下位尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数は、精神的健康が .90, 自己欺瞞が .75, 印象操作が .70 であった。

次に、Figure 1 の分析モデルに基づき、初対面の相手、親しい相手ごとに共分散構造分析を行った。なお、分析では社会的望ましさの各下位尺度得点を統制変数としてモデルに投入したが、「印象操作」からは有意なパスが得られなかったため、モデルから除外した。共分散構造分析の結果を Figure 2 に示した。適合度は、初対面の相手、親しい相手共に GFI = 1.00, AGFI = 1.00, CFI = 1.00, RMSEA = .00 であった。分析の結果、印象操作の対象が初対面の相手のとき、自己呈示から自動的な印象操作に対する有意なパスがみられたものの ( $\beta = .86, p < .01$ )、自動的な印象操作から精神的健康に対する有意なパスはみられなかつ



※「初対面の相手」に関する結果を左側、「親しい相手」に関する結果を右側に記した。  
なお、表中の数値は標準偏回帰係数を示す。

Figure 2 自動的な印象操作と精神的健康との関連に関する共分散構造分析の結果

た ( $\beta = -.17, n.s.$ )。一方、印象操作の対象が親しい相手のとき、自己呈示から自動的な印象操作に対する有意なパスがみられ ( $\beta = .85, p < .01$ )、さらに、自動的な印象操作から精神的健康に対する傾向レベルのパスがみられた ( $\beta = -.22, p < .10$ )。

## 考 察

本研究の目的は、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の程度を測定する尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検証すること、自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果について検討すること、の二点であった。本研究で得られた結果について、目的に沿って考察する。

### 対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の測定

本研究では、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の程度を測定する尺度の作成を試みた。「初対面の相手に対する自動的な印象操作」、「親しい相手に対する自動的な印象操作」それぞれの項目について因子分析を行った結果、共に1因子構造を示すことが確認された。また、尺度の信頼性については、「初対面の相手に対する自動的な印象操作」、「親しい相手に対する自動的な印象操作」のそれぞれにおいて、高い内的整合性を有することが示された。尺度の妥当性については、自己呈示動機および衝動性との関連を検討した。自己呈示動機については、自動的な印象操作と自己呈示動機の各側面との間に正の関連がみられた。また、自己呈示についても、自己呈示動機の各側面との間に正の関連がみられた。これらの結果は、従来の知見 (Schlenker & Wowra, 2003) に基づく予測と一貫するものであり、自己呈示動機が高い者ほど対人コミュニケーションにおいて自己呈示を多く行いやすく、自動的な印象操作も行われやすいということを示す結果であると考えられる。したがって、本研究で作成した尺度は、自己呈示動機を反映した尺度であると考えられる。次に、衝動性については、自動的な印象操作と非機能衝動性の間に正の関連がみられ、その関連は自己呈示の影響を統制しても確認された。非機能衝動性とは、「ゆっくり几帳面に行動することができず、先見なく行動し、結果的に行為者を不利な状況に導く行動をとる傾向 (小橋・井田, 2017)」であり、衝動性の中でも行為者に悪い結果をもたらすネガティブな側面であると考えられる。したがって、本研究で作成した尺度は、意図的ではない衝動的な側面を有した尺度であり、特に衝動性のネガティブな側面を反映した尺度であると考えられる。

以上のことから、本研究で作成した対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の程度を測定する尺度は、十分な信頼性と妥当性を有していると考えられる。

### 対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果

本研究では、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果について、自己呈示が自動的な印象操作を媒介として精神的健康に影響を及ぼすという過程を想定し、分析を行った。その結果、親しい相手に対する自己呈示が、親しい相手に対する自動的な印象操作へとつながり、その結果、精神的健康を低めるという過程が確認された。この結果は、親しい相手に対する自己呈示が精神的健康を低めるという田島 (2010) や Gosnell et al. (2011) の知見と整合する。水野 (1994) は、意に反した自己呈示は不快感や憂鬱感につながることを示している。親しい相手のように自己呈示動機の低い相手に対して

自動的に印象操作が行われることは、意に反した自己呈示として認知され、規範意識と実際の行動の不一致を招き、精神的健康にネガティブな影響を及ぼしたと考えられる。ただし、本研究で確認された精神的健康に対する自動的な印象操作の効果 ( $\beta = -.22$ ) は弱いものであり、精神的健康を大きく阻害するということではないと考えられる。

一方、初対面の相手に対する自動的な印象操作が精神的健康に及ぼす効果は確認されなかった。Gohar et al. (2016) や Gosnell et al. (2011) によると、親しくない相手に対する自己呈示は適応的であるとされている。しかし、自動的な印象操作は意図的な行動ではないため、意に反した自己呈示とも解釈できると考えられる。前述の意に反した自己呈示は不快感や憂鬱感につながるという水野 (1994) の知見を踏まえると、初対面の相手に対する自動的な印象操作には、適応的な効果と不適応的な効果の両方が存在し、その結果、精神的健康への効果がみられなかった可能性も考えられる。今後は、自動的な印象操作の適応的な効果と不適応的な効果のそれぞれを明らかにしていく必要があると考えられる。

### 本研究の貢献と今後の課題

本研究では、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作に焦点をあて、精神的健康に及ぼす効果を検討した。従来自己呈示の自動的な側面について直接扱った研究はほとんどみられず、それが精神的健康に及ぼす効果について実証的に検討したものはみられない。本研究で得られた、親しい相手に対する自動的な印象操作が精神的健康を低めるという知見は、自己呈示の自動的な側面に着目することの重要性を示唆するものであり、自己呈示に関する研究全般に対する理論的貢献につながるものと考えられる。また、本研究の結果は、対人ストレスをもたらす行動を引き起こす心理的過程について新たな知見を提供するものであり、対人コミュニケーションの問題解決や支援へとつなげることができると考えられる。

一方、本研究の留意点として二点が挙げられる。第一に、本研究では対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作の程度を質問紙法を用いて測定した点が挙げられる。質問紙法は、個人の内省報告に基づく回答であるため、自動的な印象操作のうち、内省可能な部分のみを測定しているに過ぎず、自動的、無意識的な側面を十分に測定できていない可能性が考えられる。また、本研究における自動的な印象操作尺度の項目は、意図せず行われる自動的な行動であることを強調するため、「つい～してしまう」といった表現を用いた。この表現が回答者に対して「望ましくない行動」という印象を与えてしまい、自動的な印象操作のうち、ネガティブな側面が多く反映された尺度になった可能性が考えられる。自動的な印象操作の効果を明確化するため、今後は潜在的な態度の測定に用いられる潜在連合テスト (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) など、質問紙法以外の方法と組み合わせて検討していく必要があると考えられる。

第二に、本研究が一時点での調査であるという点が挙げられる。本研究では、対人コミュニケーションにおける自動的な印象操作が精神的健康に影響を及ぼすと想定したが、一時点での調査であるため、因果関係が明確になったわけではない。例えば、精神的健康が自己呈示や自動的な印象操作に影響を及ぼすという過程も考えられるだろう。今後は、縦断調査を行うことによって、因果関係を明らかにしていく必要があると考えられる。

## 引用文献

- 安藤 清志 (1994). 見せる自分／見せない自分：自己呈示の社会心理学 サイエンス社.
- Gohar, D., Leary, M. R., & Costanzo, P. R. (2016). Self-presentational congruence and psychosocial adjustment: A test of three models. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *35*, 589–608.
- Gosnell, C. L., Britt, T. W., & McKibben, E. S. (2011). Self-presentation in everyday life: Effort, closeness, and satisfaction. *Self and Identity*, *10*, 18–31.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1464–1480.
- 石原 俊一・水野 邦夫 (1992). 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, *63*, 47–50.
- 小橋 眞理子・井田 政則 (2017). 日本語版 Dickman Impulsivity Inventory の作成 立正大学心理学研究年報, *8*, 63–70.
- Leary, M. R., Nezelek, J. B., Downs, D., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. (1994). Self-presentation in everyday interactions: effects of target familiarity and gender composition. *Journal of personality and social psychology*, *67*, 664–673.
- 水野 邦夫 (1994). 意に反した行動をした後の態度および感情状態の変化：セルフ・モニタリングとの関連 性格心理学研究, *2*, 38–46.
- Moeller, F. G., Barratt, E. S., Dougherty, D. M., Schmitz, J. M. & Swann, A. C. (2001). Psychiatric aspects of impulsivity. *American Journal of Psychiatry*, *158*, 1783–1789.
- 中川 泰彬・大坊 郁夫 (1985). 日本語版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社.
- Paulhus, D. L. (1993). Bypassing the will: The automatization of affirmations. In D. M. Wegner & J. W. Pennebaker (Eds.), *Century psychology series. Handbook of mental control* (pp. 573–587). Englewood Cliffs, NJ, US: Prentice-Hall, Inc.
- 定廣 英典・望月 聡 (2011). 演技パターンに影響を与える諸要因の検討 パーソナリティ研究, *20*, 84–97.
- Schlenker, B. R., & Wowra, S. A. (2003). Carryover effects of feeling socially transparent or impenetrable on strategic self-presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 871–880.
- 菅原 健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み, 心理学研究, *55*, 184–188.
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, *17*, 18–28.
- 谷口 淳一・大坊 郁夫. (2005). 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究, *45*, 13–24.
- 田島 司 (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関係——女子大学生を対象とした調査——心理学研究, *81*, 523–528.
- Tice, D. M., Butler, J. L., Muraven, M. B., & Stillwell, A. M. (1995). When modesty prevails: Differential favorability of self-presentation to friends and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, *69*, 1120–1138.
- Tyler, J. M. (2012). Triggering self-presentation efforts outside of people's conscious awareness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 619–627.

(2018年10月31日受理, 12月4日掲載承認)

## 文末脚注

---

<sup>1</sup> 本研究の実施ならびに論文作成にあたり, 信州大学人文学部卒業生の田中日奈子さんにご協力頂きました。記して感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 自己呈示は「意図的な行動 (Tyler, 2012)」と定義されるため, 意図せずに行われる自動的, 無意識的な行動を「自己呈示」と表すことには矛盾がある。そこで, 本研究では, 従来指摘されている自己呈示の自動的な側面を「自動的な印象操作」と呼ぶ。